

僕が少女と出逢って、少女と一緒にいて、少女と会話をしたのは僅かな時間だった。けれどそれは僕にとって永遠とも思えるくらいに長く、充実していた時で、僕は少女の顔をずっとずっと見つめていた。

少女の顔は日本人形のように真っ白な雪肌で、冬の寒さを受けてか頬がほんのりと赤く紅潮をしていて、熟れたさくらんぼのような色をしていた。長い黒髪が屋上を突き抜ける強い風に叩かれて、さながら鴉のような——悪魔のような真っ黒な翼みたいだった。

ああ、だからか、

だから僕は少女を、

天使のような人間だな、って、そう思ったし、

悪魔のようにも見えるな、って。

黒水晶のように光の反射を許すこと無い奥深い闇色の瞳に、僕を支配する僕という意識が吸いこまれながら、そう、思ったのだった。

名前も、

苗字も、

学年も知らないその少女は——

少女は僕と出逢って三分後——永遠になった。

今日は何だかとても憂鬱な日だった。

特に何かがあるわけでもないのに、僕はそう感じたのだった。

いつも通りの脳に針を刺して刺激するかのような耳触りな目覚まし時計に起こされ、母親と意味の無い会話を交わしながらテレビの向こう側に映るお天気キャスターの眠さを押し殺した声に耳を傾け、朝食の味噌汁で冬の寒さに冷え切った体をほんのりと温めるように静かに口をつけた後、ちよっぴり焦げ目のついたジャムトーストを食べた。

朝食も食べ終わり、適当に歯を磨いて、顔を洗って、学校の準備をし、玄関から飛び出す。

玄関を開けると、今にも雪が降りそうなくらいに凍えるような冷たい風が僕の小さな顔を刺した。あつという間に僕の頬と耳は真っ赤になって、触ると痛かった。だけれどそれが生きているという実感を与え、今日も一日頑張ろうという気持ちにさせることが無いことも無かった。

別にこれといって重たい病気を持っているわけでもなく、人生に絶望しているわけでもないのだが、僕にとっては本当にそんな些細な出来事が生きる原動力に、いつのまにか——本当にいつのまにか、そう、なっていたのだった。

故に僕は、つまらない人間だった。

吹き抜ける突風に抗うようにいつも通りの通学路を僕は歩く。

通勤、登校。

たくさんの人々が行き来する小さな路地は、温もりに溢れているように感じたが、だけれどやっぱりそれは偽りの温もりで、皆が皆、自分も目的の為にだけに足を動かしていると、くだらない考えを起こしてしまう僕は、文字通りの意味で本当に正常で、くだらなかつた。

けれど僕もその中の人間のうちの一人で、たとえここで凍死した死体があるとしても、クラスメイトが足を挫いて倒れていようと、気にせず、足を止めて一瞥することもなく、ただ寒さを堪えながら目を細めて学校へ向かうだろう。

僕は、僕の目の前を歩いている、僕と同じ制服を着て、寒さのあまりかポケットに手をつまみながら前かがみで歩く二人組の男を見ながら、いつも通りそんなことを考えてしまったのだった……。

乾いた冬の空気をぶち壊すかのような単車のエンジン音が響き、僕の憂鬱とやらはさらに加速した。

道端で犬の首輪に繋がるチェーンを握りしめながら下品な笑い声で笑い合う複数人の主婦の音がエンジン音と対をなすくらいに耳触りで、今日の僕は、いつもより、いや普段もものすごくつまらない人間なのだが、今日はよりいっそう、つまらない人間だった。

学校に到着し、自分のクラスである2-Dにの教室に入ると、そこはなんだか生温かった。群れになった人間が作り出す気温と、備え付けのヒーターが出す熱風が混ざり合い、不快な室温が僕の目を焼いた。こういう時ほど、眼鏡をかけていなくてよかったと思ってしまった。だからこの時は、自分の唯一の取り柄が視力なのではないだろうか、くだらない戯言を考えてしまったのだった。

無機質な朝の挨拶を脊髄でかわしながら僕は人の群れを掻きわけて自分の席に腰を下ろす。ほぼ空っぽに近い真新しい鞆を机の上に置き、僕は虚ろな目で壁にかけてあるアナログ時計を見ると同時にHLの始まりを告げるチャイムが耳を突き抜け、ざわついていた教室に静寂をもたらした。

今日も無意味なことの繰り返しが始まる。

僕は小さく、誰にも気づかれなないように――いや誰も僕なんか気にかけるような人なんていないのかもしれないけれど、小さく溜息を吐きだした。

僕は何を思ったのか。

ここからの僕は、いつも通りではなかった。

何故なのだろう。

考えても理解することは到底出来なかったし、

それがだんだんと、どうでもよくなってきてしまったのだった。

だから僕は……。

一限目の授業終了のチャイムが鳴った瞬間から休み時間は始まり、皆一斉に席を立つ。テンプレートのありがたうございましたを言うこともなく、生徒はようやく待ちに待った短い休み時間に声を弾ませる。

僕は心の中でテンプレートを苦笑しながら呟きながら席を立ち、騒がしく胸糞悪い教室を後にした。

特に何をするわけでもなく教室から出た僕は、永遠に伸びているかのような鉄筋コンクリートの廊下を静かに歩いた。僕が一步踏み出すごとに軽快な音が響き渡るのが、ちよつぱり心地よかった。

……………。

……………。

……。

気がつくとも僕は、屋上にいた。

空が近かった。

空そのものだった。

——手を伸ばせば、空を掴めそうさ。

僕は真冬の海よりも冷え切った給水塔に背中を預けて腰を下ろす。

「あれ、珍しい。先客がいるなんて」

二限目のチャイムが鳴っている最中、そんな声が聞こえてきた。

僕は視線だけを動かすと、屋上の重たい鉄の扉が短い音を立てながら開き、女の子が顔を出していた。

「どうも」

視線を再び低い空に戻しながら僕は乾いた唇から声を出した。

「どうも、こんちわっ」

僕とは全く正反対の、桃色の潤った唇から発生した明るい声色は、この乾いた冬の空気を切り裂くかのようにして出された声で、僕の耳に侵入し脳を刺激する。

「あの、僕ここにいちや不味いですか？」

全ては脊髄が決めることだった。

僕の口から出ている言葉は、脳で考えること無く、脊髄だけが勝手に思考していた。

「——なんでそう思ったの？」

少女は僕の正面に立ち、後ろに腕を組みながらそう尋ねる。

屋上を吹き抜ける風が、学校指定よりも僅かに短くされた紺色のスカートと、太陽の光を浴びても色素が変わることの無い漆黒の髪を揺らす。

「え、だって、先客がどうのって。だからここ、いつも使ってるのかなあって」

いつの間にか僕の視線は空から少女へと移動していた。

莓大福のような頬に——いや、少女そのものに、僕の視線は全て奪われていた。

膚。

僕の眼は、少女の物に。

「学校の屋上なんて誰のものでもないでしょ？ 君は変な人ね」

そう言って少女は壊れた人形のように、けれど不快に感じない優しい笑顔で笑った。か細くなった闇色の奥深い瞳がとても愛らしい。

「そうなんですか？」

「そうだよ」

「そんなこと、初めて言われました」

——変な人。

その言葉を突き付けられたのは今日が初めてだった。

だから僕はその言葉が何を意味するのかに理解するのにたくさんの時間を所要したし、その言葉が僕に何を、周りに何をもたらすかまでを理解しようとしたのならば、人間の一生はあまりに短いものなのではと悟る。

「嬉しいかい？」

「あんまり、嬉しくはないみたいです」

それは素直な感想だった。

素直な感想？

ただ無関心なだけではなくて？

「そりゃあそうだろうね。だって褒めてないんだからさ」

「そうですか」

そう言っただけ少女は再び笑う。

少女は完成されていた。

「……………」

完結していた。

「……………」

それは美しさでもそうだし、おそらく、人間としても、だ。

終わっていた。

それ以上でも以下でもなかった。

——完璧なままでな容姿と、未来永劫全てを悟りきったかの如く達観。

いくら無知な僕でも、それくらい、簡単に理解出来る、とても簡単なことだった。

「ずっと見てないで何か言いたいことがあるなら言いなさいよ、君」

僕と少女の視線が混じり合い、瞳と瞳が出逢う。

僕が覗いた彼女の瞳は、生きてはいなかった。

黒水晶の中で光が反射すること無く、ただ闇が広がっているだけだった。

「すいません……。えっとそうですね、あなたはよくここに来るんですか？」

「ええ」

胸元に手を当てて偉そうに、自信満々に頷く少女。

その何て事の無い動作がともて愛らしい。非常に、愛らしい。

「サボりに？」

「失礼だね。今日はたまたまだよ」

完成された少女は、未熟だった。
いや、違う。

釣られただけなのかもしれない。全ては少女の思惑の上で道化を演じさせられていたのかもしれないし、既に屋上全体が道化だったのかもしれない。

「本当ですか？」

「まあ、嘘だけど」

少女は後ろめたさの欠片もなく冷静に、僕の瞳を破壊する勢いの眼差しを見せてつけて笑う。

「なんかそんな感じがしました」

「君は失礼だよ、本当に」

「そうでしょうか？」

その言葉も初めてだった。

空っぽの僕を彩る言葉では無かったが、何かを満たすことは出来たように感じる。

「ええ、そうよ」

だから僕は少女から視線を外すことなく、

「……ここ、いい場所ですね」と。

「まあね」

「なんだか僕も、これからここに来てしまいそうです」

少女が僕にそう言わせ、僕が少女にそう言いたかった。

ただそれだけの台詞だった。

「——いや、たぶん君がここに来るのは最後だと思うな」

そんな台詞を唐突に吐きだした少女は孤高だった。

少女からは決して届かぬ高見へと目指すイカロスのごとく脆く、儂い、陰りが見えたような気がした。

「え？ どうしてですか？」

思考は停止していた。

考えるよりも、尋ねる方が、遙かに、時間の短縮でもあったからだ。

それと、彼女の思想に、凡人の僕が付いて行くことは出来ぬ、と。

「なんとなく、そう、思っただけだよ」

少女は言葉を濁らせたが、絶対の確信の元でそれを選び口に出したということは明白。

さらに言葉が続くことも明白——

「君は——生きてるのかい？」

生きてるのかい。

心臓。脈。脳。息。僕。

「……ただ生きてることが、生きているということにあてはまらないのなら僕は——」
その先の言葉は出てこなかった。

いくら絞りだそうとも、脳の限界を超えた言語を、口から煉り出すは絶対にして不可
能だったからだ。

「なるほどねえ」

けれど少女は理解する。

理解出来る。

だから、少女は終わっているのだ。

「まだ最後まで言ってみせよ」

「言わなくてもわかるよ。大体ね」

大体などではない、完璧に、だ。

だから、少女は始まりがないのだ。

「どうしてですか？」

どうして、

どうして、あなたは完璧なんですかって。

「似たような空気を感じたから」

「僕はそうは思いません」

僕の脳は速答していた。

否定。

僕は、そう、思わなかった。

人間が自分の身長の数倍近くある巨大な熊と戦い、敗れることが当たり前なのと同じよ
うに、僕は、少女と似ていると思うことは絶対に無かった。

「おもしろいね、君」

完璧な人間がそう言うのだから、そうなのではないだろうか。

そんなくだらないことも考えついたが、全ては過言だった。

「あなたのように利那的な人間じゃないですから僕」

脳でも、脊髄でもない、

僕自身の言葉は、とても利那な言葉だった。

けれど核心をついていて、いやむしろ、それが答えで、世界で、

少女の全てで——。

「知りもしないでよく言うね」

「知らなくても見ればだいたいわかりますよ。同類っぽさそうですし……」
似ていない。

しかし、同類。

近しい者同士。

全く正反對で、対で。

向こうが終わりなら、僕は始まりで。

けれど僕は始まってなどいなくて、ただ止まっているだけで。

停滞。

「でもそれぞれ違う人間だよ」

「当たり前じゃないですか」

「そうだね」

少女は笑わなかった。

僕も笑わなかった。

それだけのことだった。

「じゃあ、そろそろ私は逝くよ」

最後にそう言っって少女は――

「さよなら」

永遠を求め、永遠を誓った。

今日の少女は、飛べなかっただけ。

地へと還って逝く少女を、僕は、静かに見つめているだけだった。

少女との出会いにより、僕の日常に変化は無かった。

少女との出会いにより、僕自身に何か変化があった。

それにより、だんだんと僕の日常は変化していき、

僕はあのたった三分という儚い時間により、

少しだけ、勇気を貰ったような気になった。

たった三分という刹那的な時間だったけれども、

僕にとっては永遠に忘れること無い出来事だったのだ――。